University of Shizuoka

V.P.ダニーロフ　再読
― 批判的継承に向けて―（Ⅰ）

西　山　克　典

『国際関係・比較文化研究』第 9 巻第 2 号(2011年 3 月)抜刷

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

研究ノート

V.P.ダニーロフ　再読 ― 批判的継承に向けて―（Ⅰ）

西　山　克　典

はじめに

ソ連体制下で反スターリン主義の立場を貫き、ソ連崩壊後も意欲的な研究を展開していた歴史家ヴィクトル・ペトローヴィチ・ダニーロフは、2004年４月16日に逝去された。このロシア農民史の大家にはタイプ原稿が残されていた。遺稿は、Ａ４紙に１枚30行、全29枚のロシア語原稿である。夫人のリュドミラ・ヴァレリアーノヴナさんが論題に付した＊補注には「著者が補足し校訂しようとしながら十分に果たせなかった論文の異稿である。ダニーロフの自宅文書には、20世紀90年代を以って終わるこの論文の下書きがある」と書き記されている。この「ロシアにおける農業の運命（1861-2001年）Судьбы сельского хозяйства в России (1861-2001 гг.)」と題されたテキストは、2009年４月に彼女から釧路公立大学の松井憲明氏に託され、12月には松井氏より私への翻訳紹介の話とともに送られてきたものである。

ダニーロフのこの遺稿は、過去一世紀半のロシア農業、その改革と革命の歴史を叙述するとともに、21世紀を迎えそこに突入していく状況でロシア農業の未来を展望する内容となっている。私が12月7日に受領したのはＡ４で29枚のこの原稿であるが、この原稿をベースにし、ロシアでのそれぞれの政治状況とも交錯しながらダニーロフはいくつかの論文を発表している。主要な論文は、1992年、2002年、2006年に発表された以下の三つである。

１）В.П.Данилов. Аграрные реформы и аграрная революция в России. ≪Великий незнакомец. Крестьяне и фермеры в современном мире≫. Хрестоматия. Сост. Т.Шанин, М.,1992, С.310-321.

２）Его же. Аграрные реформы и аграрные революции в России (1861-2001). ≪Россия в XX веке. Реформы и революции≫, под общей редакцией Г.Н. Севостьянова, Т.1, М.,2002, С.20-37.

３）Его же. Судьбы сельского хозяйства в России (1861-2001 гг.) ≪Крестьяноведение≫, вып.5,М.,2006, С.10-29.

これら三つの公刊論文と遺稿＝原稿とでは、そこに用いられている語彙と配列、各

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

文の続き、パラグラフの配置は基本的に同じであるが、その都度、原稿からの削除と補足がなされている。これらの変換、削除と補足にもかかわらず、遺稿と三つの論文を貫くダニーロフの理念は共通し脈打っている。したがって、この原稿は三つの公刊論文の母体となった下書き草稿であるにとどまらず、ペレストロイカとそれに続くソ連崩壊後の状況のなかで、彼がロシアの農業と農民史の理解にむけて作成した基本的論考と位置づけられる。

さて、この遺稿の翻訳と紹介を意図しつつ、著者ダニーロフの研究とその遺稿の意義を理解するために、この研究ノートは準備された。このノートでは、まず学者としてのダニーロフの経歴を紹介し、ソ連社会でスターリン批判が進められた60年代からその揺れ戻しの確定する70年代初めと、ペレストロイカとソ連崩壊以降の90年代を中心に、彼の活動を紹介し、ついで遺稿の著者ダニーロフのロシア農業・農民史における基本的な視座を提示する。そのうえで、最後に、ソ連体制のもとでスターリン批判を担った一世代の研究者、自らを「60年代人」とアイデンティファイし生き抜いた著者が提起したロシア農業・農政史の問題とともに、彼の思想と成果の批判的継承に向けてロシア農民史研究の課題に触れてみたい。

Ⅰ．ヴィクトル・ペトローヴィチ・ダニーロフの略歴

彼の経歴と研究については、すでに20世紀の偉大な歴史家の一人として日本でも夙に知られ、『二十世紀の歴史家たち』（1999年）で、奥田央氏が懇切に紹介している。[1] また和田春樹氏によって第二次大戦後のソヴェト史学の新しい息吹と反動、60年代から70年代にかけてのスターリン批判の進展と揺れ戻し、ペレストロイカの渦中での歴史家たちの動きが、一連の史学史ノートとして発表されている。この同時代的でかつ先駆的な研究は、歴史家ゲフテェルを中心に各種の雑誌、歴史書、そして「内部文書」も利用して跡付けられており、そのなかでダニーロフにも多く言及されている。[2] しかし、その後、ダニーロフは2004年の4月16日に80歳を待たずにこの世を去った。『歴史の諸問題』誌は、翌年、その第9号で、彼を追悼し、「ヴィクトル・ペトローヴィチ・ダニーロフの研究創作の道」を掲載している。研究者としての歩みと業績は、そこに詳しい。[3] また、ソ連体制の崩壊と新生ロシアの誕生という状況のなかで、歴史

1　奥田央「ダニーロフ」、尾形勇・樺山紘一・木畑洋一編『二十世紀の歴史家たち(3)』世界編　上、刀水書房、1999年、339-350頁。これに先立って石井規衛氏による紹介がある。石井規衛「ダニーロフ」『歴史学事典』第5巻『歴史家とその作品』弘文堂、1997年、321－322頁。

2　和田春樹「戦後ソ連における歴史家と歴史学　−ソ連史学史ノート（その一）−」『ロシア史研究』第25号（1976年6月）2-32頁；同「流れの変化に抗する歴史家たち−ソ連史学史ノート・1964-66年−」同第32号（1980年11月）2-25頁；同「転換するソ連史学 −1968－70年−」『社会科学研究』第37巻第5号(1985年12月)。これらの研究ノート三部作に続き、ペレストロイカの進展するなかで歴史家の動向を生き生きと描いたものとして、次がある。和田春樹『私の見たペレストロイカ−ゴルバチョフ時代のモスクワ−』岩波新書、1987年、108-122頁。

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

学が新しい歴史認識と方法を模索し、帝政時代を含め歴史家たちとその業績を問い直し位置づける作業が、ロシアでは活況を呈している。ソ連体制とそれを担ったソヴェト史学の崩壊のなかで、歴史学の自己認識としての史学史の取り組みも進展し、新たな史料の公刊や歴史家たちの回想もでている。ダニーロフという農民・農業史の大家とソヴェト史学の位置づけも明らかにされる状況が拓かれている。この研究ノートは、このような新しい状況のなかで、ダニーロフの活動を中心に、他の研究者たちの行動と有機的に関連付けつつ、ソヴェト史学の展開と終焉、その局面でのダニーロフの活動を跡付けることを課題としている。

さて、彼は1925年３月４日、オレンブルグ州のオールスク市に「半ば農民、半ば手工業」を生業とする家族に生まれた。[4] オールスクは、南ウラルのオレンブルグから南東へ327キロの、オリとウラル両河の合流する地点の小都市で、そこの労働者の家庭に九人の子沢山の一人として生まれている。第二次大戦のなかで1943年に18歳で軍に応召し、砲兵学校を修了し、前線で小隊を指揮し、この軍において共産党に入党している。戦後は、1950年にオレンブルグ教育大学史学部を卒業し、1954年にソ連科学アカデミー歴史研究所の初級研究員となり、研究者としての道を歩み始めた。スターリン批判後の1957年末から69年４月までソ連農政史グループを指導し、80年代後半に始まったペレストロイカのなかで、87年から92年に科学アカデミーのソ連農業史部の長を務めた。ソ連崩壊後は、歴史研究所で農業変革史のグループの指導にあたり、その後、モスクワ高等社会・経済学校の教授として、そこの農民研究センター Центр крестьяноведенияを主導した。[5]

ソ連体制のもとでのこのような研究を通じて、ダニーロフは大著のモノグラフィー、五点を公刊し、学術誌や各種図書への記載論考は350件を越えた。また、ソ連および国外での学術会議の組織にも当たり、そこで報告し講演を行っている。ソ連を代表する史学誌である『歴史の諸問題』や『歴史雑誌』などの編集にもたずさわり、ソ連の崩壊後は、農民反乱や農業集団化に関する一連の史料集の編纂と公刊に積極的に取り組んできた。このような彼の業績に対し、2004年にはロシア科学アカデミーからソロヴィヨフ金賞が授与されている。[6]

3　Вылцан М. А.　Емец В. А.　Слепнев И. Н.,　Творческий путь Виктора Петровича Данилова. ≪Вопросы истории≫, 2005 ,№9, С .150-162.

4　А. А. Чернобаев.　Историки России.　Кто есть кто. Саратов,2000 , С.138 .

5　Вылцан М. А.　и др.,　Творческий путь, С.150-151;　Историки России, С.138-9 .

6　Вылцан М. А.　и др.,　Творческий путь,　С.150,161 . ソロヴィヨフ金賞 Золотая медаль имени С.М. Соловьева は、ソ連崩壊後にロシア科学アカデミーが歴史家ソロヴィヨフの名を冠し歴史研究において傑出した業績をあげた「祖国の学者」に設けた賞である。第一回は、1999年に白樺文書をはじめ10-15世紀ロシア中世史研究に対し、ヤーニン Янин, В. Л. が受賞している。第二回目は、ダニーロフが「ソヴェト期のロシア農村史に関する一連のモノグラフィーと史料の公刊」に対して2004年に受賞している。第三回は、2009年に13-15世紀ヨーロッパ中世史をビザンツとイタリアを中心に研究するカールポフ Карпов, С. П. に与えられている。

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

Ⅱ．対抗 － 歴史学における反スターリン主義の闘い

このような輝かしい業績と経歴の背後には、しかしながらソヴェト史学におけるスターリン批判の進展、その屈折と頓挫、さらに研究者たちの苦悩があり、ダニーロフはそのソヴェト史学の光と影の交錯する世界に生きた研究者であった。彼は、第二次大戦へとソ連が突入していくなかで赤軍に応召し、そのなかで共産党に入党し、復員して歴史研究の道につき、戦後のスターリン批判のなかで育った、いわば典型的な「60年代人」であった。そして、やがて訪れたスターリン批判への揺れ戻しに抵抗し、70年代以降は研究生活における不遇と忍従をたえた一連の研究者に属している。彼らはペレストロイカのなかで復権し、ダニーロフはソ連崩壊後のロシア農業の危機と改革へ鋭い批判をおこない、新たな研究を目指し論陣を張った。その意味では、彼を追悼した『歴史の諸問題』誌が、ソ連体制の求める「公許歴史学」に鋭く対立し、「ダニーロフは祖国の歴史学における虚偽と捏造に反対し、その自由で創造的な発展を求めて闘った。最も積極的な歴史家にして60年代人の一人」と評価したのは、正鵠を射ているといえよう。[7]

これらの一群の「60年代人」歴史家のソ連体制のなかでの闘いに関しては、すでに和田氏による先駆的な研究がある。彼は、歴史家 M.ゲフテェルに焦点を当てつつ、60年代ソ連の歴史研究の動向とスターリン批判をめぐる社会思想の展開を「内部資料」も援用しながらたどっており、そのなかでダニーロフの活動にも諸処で言及されている。[8] ダニーロフは、1960年代のソ連歴史学においてスターリン批判を受け歴史学の分野で革新を先導したグループ、つまり、所謂「新傾向 новое направление」と呼ばれる人々と密接に関係を持ち、そこから多くの影響を受けていた。この「新傾向」の中核を担ったのは、帝国主義時代のロシアの社会経済構造の分析を進めたシードロフ派の研究者たちであった。[9] 彼らは、やがて「多ウクラード性 многоукладность」という視点から、スターリン史学でのロシアを遅れた「半植民地的な従属」と規定する認識を超えて、革命の前提としてのロシア資本主義の後発性、帝国主義時代の社会経済の構造と特性、階級配置とその同盟関係、革命の性格などで新しい見解を提起した。この研究動向のなかに、帝政期の農業＝農民を扱ったA.M.アンフィモフ、植民地の農業構造を対象としたП.Г.ガルーゾも含まれており[10]、ダニーロフも1920年代のソ連

7　Там же, С.150 .

8　和田氏は、スターリン批判への揺れ戻しに対し「反崇拝的団結」を主導したのは「思想＝理論的な面では、ゲフテェルの史学方法論部であり、政治的にはダニーロフの党委員会であった」と指摘している。和田春樹「流れの変化に抗する歴史家たち」、23頁。

9　このシードロフ学派に関しては、次を参照されたい。П. В. Волобуев, А. Л. Сидров как университетский профессор. ≪Отечественная история≫, 1993,№2, С .121-7.その先頭にはシードロフＡ .Л . Сидров、その下で育った優れた学者としてゲフテェルМ. Я . Гефтер, ギンジンИ. Ф. Гиндин,イヴァノフЛ.М. Иванов, タルノフスキーК. Н. Тарновский, ヴォロブーエフП. В. Волобуев, アヴレフА. Я. Аврехなどがいる。

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

の農民と農業の全面的集団化を対象とした研究者として、この「新傾向」派に共鳴して研究を展開した。

さて、1965年11月にダニーロフは、ソ連科学アカデミー歴史研究所の党委員会書記に選ばれた。これは研究所で実質的に初めての民主的な選挙であった。候補が前もって党機関の階梯のなかで調整され定められることがなかったからである。すでに、この研究所は体制側から「修正主義」との厳しい評価を下されていたが、前年の64年10月にフルシチョフの解任を決定した共産党中央委員会総会以降、研究所では多くの研究者がフルシチョフ期の「雪解け」の成果を保持していこうとしていた。ダニーロフとタルノフスキーを中心に党委員会の報告「歴史学の状況とソ連科学アカデミー歴史研究所党組織の課題」が書き上げられ、この報告の仕上げには研究所の党員全てが参加していた。この報告は、1966年の２月19日に研究所の党集会でダニーロフによって報告され、殆ど一致して承認された。この報告では、学術と社会生活における民主的原則の遵守が求められ、一連の理論的かつ方法論的な問題が提起されていた。社会における歴史学の役割、個々の事象の研究に対する禁圧や学術への官僚＝行政的な監督の撤回、検閲の全能への批判などが述べられ、学術における自由で民主的状況を作り出すことが求められていた。この報告は、スターリン批判への揺れ戻しに対して、ソ連社会から、しかも主要な学術機関からなされた初めての抵抗であった。[11]

歴史研究所で党委員会によって歴史学の状況と課題に関する報告が作成される過程

---

10 アンフィモフについては、日南田静真氏が彼の研究の紹介に努めた。帝国主義のもとでの社会経済構造の分析と革命の展望で、ガルーゾの認識は、シードロフ学派から高い評価を得ていた。シードロフが生前に残した文章に、ガルーゾの研究に関する書評がある。 А.Л. Сидров. П.Г.Галузо,Аграрные отношения на юге Казахстана.≪История СССР≫,1996, №6,С.134-136. ゲフテェルも、スターリン批判を進めた文芸誌『ノーヴィ・ミール』にガルーゾの研究への高い評価を寄せている。ゲフテェルは「反植民地革命」という用語が歴史文献や教科書でしかるべき地位を占めていないと指摘し、具体的歴史的内容によって満たされた「植民主義」や「帝国」という概念なしに半歩たりと進むことはできないとガルーゾたちの研究を評価する。ガルーゾが「政治は反動的、経済は進歩的」とのテーゼに反駁し、帝国への統合を「諸民族に内的な固有の統合への志向」の産物とみるのを批判していることを指摘し、植民地の社会＝経済構造は「多ウクラード性」の問題と関連し解明することを現代の歴史学は求めていると主張していた。М.Гефтер. Великая антиколониальная революция. ≪Новый мир≫,1969,№7,С.272-6. 和田春樹は、ガルーゾが『歴史の諸問題』誌に投稿した論文が不採用になり、同誌編集長が64年9月14日付けでアルマ・アタのガルーゾへ宛てた不採用決定の手紙を紹介している。この手紙では、ガルーゾの主張がロシアへの併合を進歩的とするソ連史学のテーゼに反することが、不採用の理由の一つとされていた。和田春樹、「流れの変化に抗する歴史家たち」、7-8 頁。ガルーゾの投稿論文「ツァーリズムの植民政策に関するレーニン的概念」をめぐり『歴史の諸問題』誌でなされた論議は、スターリン批判の進展する60年代前半にあって歴史学のなかで帝政ロシアへの「併合」がどのように検討されたかを具体的に示して、興味深い。シードロフ派の人々は、シードロフ、ギンジン、ゲフテェルをはじめガルーゾに好意的で、スターリン時代に形成された「併合」と植民地支配に関する思考を再検討することを支持した。タルノフスキーは「併合」に際しての「≪最小悪≫の定式」とそこでの「理想化の傾向」の再検討が必要とし、「併合」を「ばら色」に描くことを明確に批判したことが注目される。А.Н.Сахаров. Встречи в редакции. Обсуждение вопроса о колониальной политике царизма. ≪Вопросы истории≫, 1963, №11, С.148-153. ガルーゾ(1897−1980)は、すでに1920年代にГ.サファーロフとともに「植民地革命」の問題に取り組み、1930年代以降の研究への抑圧を越えて、スターリン批判後は、カザフスタンの植民地構造の分析において大きな役割を果たしていた。西山克典『ロシア革命と東方辺境地域』北海道大学刊行会、2002年、8-９頁、注(7)。

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

と並行して、ダニーロフとC.И.ヤクボーフスカヤは『ノーヴイ・ミール』誌に「歴史学における黙否法について」という論考を寄稿している。編集長A.T.トヴァルドフスキーのもとで、同誌に掲載するものとして受理されたが、検閲総局Главлитがその公表に反対し、その校正刷りが国家出版局 Госкомпечатьに送られ、同局は党中央委員会の決裁を求めた。党中央委員会は、その公表を棄却し、ダニーロフとは「面談 беседа」が設定された。この寄稿論考にこめられた思考は、公表の禁止で立ち消えになったのではなく、歴史研究所の党委員会の先の報告にも取り入れられていた。[12]

この論考が、検閲総局から国家出版局を介し党中央委員会の学術部に送られたのは、先の研究所での党集会の前日、2月18日である。[13] そして、この日、つまり、2月18日付けで、国家出版局の議長H.A.ミハーイロフは、自らの署名を附し、この公表を求めた論説の背景とダニーロフの研究について、党中央委員会に説明する文書を送っている。

ミハーイロフは、まず、この論考が『ノーヴイ・ミール』誌第2号への公表に向けて、検閲総局への査読に付された状況を説明する。中央委員会へのこの報告のなかで、彼は執筆者らが「傾向的に тенденциозно」判断をなしており、トロツキーやジノヴィエフの活動を全面的に開示することを求めるのは「党の政策に異議を唱える」ものと指弾し、次のように講評していた。「このように、この論文では、国の工業化とこれを基礎にした農業集団化に向けた党の総路線は、レーニンの教示を実現したのみならず、ネップからの“活路”であったという状況に疑念を呈しているのである。」[14]

そのうえで、「提出された形では」論考の公表は許されないとの判定を伝えた。その際に、ミハーイロフは、この判定を補足するかのようにダニーロフの研究に関する情報を伝えている。まず、ダニーロフがこのような見解を一度ならず出版物において

---

11 ВылцанМ.А. и др., Творческий путь, С.155.ソ連科学アカデミー歴史研究所の党委員会において反スターリン主義の立場を擁護した中心人物として、他の文献でもタルノフスキーとダニーロフの名が挙げられている。研究所では、1965年秋に党組織の書記にタルノフスキーが選出されたが、上級の地区党委員会が彼を候補として拒否し、ダニーロフが書記に選任された。そして、研究所の党組織でソ連社会における歴史研究の状況に関し報告が作成され、党集会で承認されたのである。В.В.Поликарпов. ≪Новое направление≫50-70 - х гг.: последняя дискуссия советских историков. Россия XX век. Советская историография. М,1996, С.397, прим.79 : Елец В.А.,Шелохаев В.В. Творческий путь К.Н. Тарновского.≪Исторические записки≫, М,1990, Т.118, С.208 : Я.С.Дравкин." Даниловский партком" и " дело Некрича". Отрешийся от страха. Память А.М. Некрича. Воспоминания, статьи, документы. М,1996, С88-89.

12 В.П.Данилов, С.И.Якубовская. Неопубликованная статья"О фигуре умолчания в исторической науке". ≪Археографический ежегодник за1992 год≫,М,1994, С.325.

13 Там же, С.326.

14 Там же, С.335 .ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ミハーイロフ（1906-1982）は、1938-52年にコムソモール中央委員会の第一書記、52年10月から翌年3月まで党中央委員会書記を務め、その後、54年までモスクワ州党委員会第一書記を務め、スターリン体制のなかで頭角を現してきた人物である。スターリン批判後は、ポーランド、インドネシア大使を務め、フルシチョフの失脚後、1965-70年にソ連閣僚会議付設の出版委員会〔局〕Комитет по печати の議長を務めている。

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

述べようとしたと指摘される。例えば、1965年５月に、『ノーヴイ・ミール』誌に他の歴史家とともに公開状を出そうとしたことである。そこでは、ソヴェト体制のもとでは「“二つの真理”という概念 концепция" двух правд"」が存在するという「誤った判断」が述べられていたとミハーイロフは指摘する。この公開状の試みは、編集長トヴァルドフスキーへの批判に反批判で応えようとするものであり、この公開書簡は、党中央委員会の文化部の指示で印刷を許可されることはなかった。[15]

ミハーイロフの指摘する第二の点は、ダニーロフの編集で、彼も執筆しムィスリ社から65年に出版された『ソ連邦における農業集団化 1927-1932年』（Коллективизация сельского хозяйства в СССР в 1927-1932 гг.）についてである。ミハーイロフは、この研究書においては「誤りと行過ぎ ошибки и перегибы」に主な関心が向けられ、トロツキスト＝ジノヴィエフ反対派と右翼偏向との闘いについては言及されなかったと指摘し、とりわけダニーロフとИ.ゼレーニンの執筆した箇所に、これが該当すると指摘した。[16]

第三に、『ソヴェト歴史百科事典』第７巻（1965年）に所載された、ダニーロフの執筆項目「ソ連邦農業の集団化」が取り上げられていた。ミハーイロフは、ここでは「右翼日和見的偏向」との闘いが回避されていると指摘していた。[17]

国家出版局議長ミハーイロフのこの２月18日付けの報告では、この論考を共同で執筆したヤクボーフスカヤに関しては「歴史学博士」と肩書きを紹介するのみであるが、「歴史学得業士 кандидат」のダニーロフに関しては、その社会的活動と農業集団化の研究における問題点を具体的に列挙し、批判していた。これは、共産党の側からのダニーロフの研究動向と活動に対する警戒と批判の報告書でもあった。

２月18日付けミハーイロフ報告に対して、党中央委員会の学術部の部長補佐С.トラペーズニコフの4月16日付け「調査書 справка」は、この問題でダニーロフとの「面談 беседа」が行われ、農業集団化の著書に関してもダニーロフを含めた執筆者たちとの「会議 совещание」が設けられたことを伝えている。[18] 党中央委員会が、２月から４月にかけてダニーロフらの論考の公開を抑止し、農業集団化研究へ行政的圧力をかけたのである。共産党中央委員会の理論政治誌『コミュニスト』が、この年２月

15 Там же, С.336.1965年5月のダニーロフら歴史家たちの公開書簡の試みは、ヴチェーチチが『イズヴェスチィア』4月15日号でトヴァルドフスキーの論説「記念日にあたって」を批判したことへの反批判であった。А. Твардовский, По поводу юбилея,≪Новый мир≫, 1965, №1, С.3-18: Е. Вучетич. Внесем ясность, "Известия", 15- го апреля 1965 г.ヴチェーチチ Е.В.(1908-74)は、1940年代から60年代にかけてのソヴェト・モニュメンタリズムを代表する芸術家であり、第二次大戦におけるソ連軍と将兵を称える塑像・建造物で名高い。彼は、トヴァルドフスキーの論説を批判するなかで、第二次大戦を例示しながら「真理 правда」には、「出来事、事実の真理」と「生活と人民の闘いの真理」があり、両者を区別するために芸術家の鋭い洞察力が必要であると述べていた。トヴァルドフスキーを擁護する書簡は、その起草者はゲフテェルで、彼にダニーロフ、タルノフスキーらを含め7人の連名で準備されていた。和田春樹「流れの変化に抗する歴史家たち」、13-14頁。

16 В.П.Данилов, С.И.Якубовская. Неопубликованная статья, С.336.

17 Там же, С.336.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

発行の第3号でヴァガーノフの論文「農業の改造」を載せ、ダニーロフ批判にのりだした。[19] ちなみに、2月16日には、党中央委員会付属のマルクス＝レーニン主義研究所でネクリチA.M.の著作『1941年6月22日』の審議がおこなわれ、これはネクリチ事件の始まりを告げるものであった。66年2月は、まさにソヴェト史学の大きな転機をなしたといえよう。

さて、公表を求めながらその裁可を得れなかった論考「歴史学における黙否法について」とは、どのような内容であったのだろうか。これは、スターリン批判後のソヴェト歴史学の成果とさらなる発展のための課題を提示し、その障害としての「黙否法 фигура умолчания」について述べたものである。そこでは、スターリン批判後の「9－10年間に、ソヴェト歴史学において教条主義や浅薄な乱読 насчетничествоに対し、また、単純化や一面化、図式主義に対しての闘い」がなされ、ソヴェト歴史学でのレーニン文献と党文献の公刊、統計集の出版がなされ、新編『ソ連共産党史』第一巻が上梓されたことをとりあげ、「それ故、第20回共産党大会のとき以来、歴史学の発展において、新しい全く実りある段階が始まった」と肯定的に総括する。しかし「我々の歴史学が」十分にその機能を果たしてはいないと指摘し、それは研究を妨げる「外的な諸原因」のためであり、その最も深刻な障害として「名だたる黙否法」があると、論を進めていく。[20]

この「黙否法」によって、個人崇拝のいくつかの結果と関連して歴史のページから十月革命と内戦期に活躍した多くの人々が黙して消去されただけでなく、彼らが関連した事実も秘匿させられたと指摘し、著者らは、今日まで続いている「科学とは異質な志向によって強いられた黙否　умолчание」から、歴史家は手を切るべきであると主張する。具体的には、トロツキーとジノヴィエフの名が挙げられ、“黙否法”が学術の問題にも及び、この弊害が革命と内戦期、ネップの問題に及んだと指摘される。また、革命の敵、さらにブルジョワ、小ブルジョワ政党は無視され、その研究が行われなくなり、ソヴェト社会の研究では「出発と結果」を「指令と報告」に基づいて述

18 Там же, С.336. セルゲイ・ミハイロヴィチ・トラペーズニコフ（1912-1984）は、ブレジネフがモルダヴィア党第一書記として活動した1950年7月から52年に、ブレーンとして彼を支え、ブレジネフが1964年10月に党第一書記（後に書記長）に就くと、65年から83年までブレジネフ体制で党中央委員会付属の学術部長を務めた。彼は65年10月8日の『プラウダ』に「マルクス＝レーニン主義 - 社会科学発展の揺るぎなき基礎」を発表し、ブレジネフ体制のもとでの党の学術政策の基本方向を提示した。ここでは、まずスターリン批判の進行を抑止する論理が示されている。スターリンの誤りと欠陥を「個人崇拝」の結果と限定し、社会主義の本質に固有ではないと切り離し、「個人崇拝の現象の視点からのみ」現実を捉えようとする歴史学や芸術を批判した。学術の分野では、「主観主義」と「主意主義」の現れを批判するというかたちで、これはフルシチョフ批判の常套句であるが、農業集団化と大祖国戦争の解明に「正しくない評価」や「由々しき誤り」があると指摘していた。これは、名こそ挙げていないが、暗にダニーロフとネクリチの歴史研究をさしていた。С. Трапезников. Марксизм-Ленинизм－незыблемая основа развития общественных наук.≪Правда≫, 8 Октября 1965 г.

19 名指しはないが、『ソヴェト歴史百科』第7巻のダニーロフの項目論文が批判されている。Ф. Ваганов. Преобразование сельского хозяйства. ≪Коммунист≫,1966,№3, С.95.

20 В. П. Данилов, С. И. Якубовская. Неопубликанная статья, С.327.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

べ、過程を描かず、「時代の精神」を再現する可能性が奪われたとし、歴史的な人物の性格づけには「因循さ косность と直截さ прямолинейность」がみられた、と指摘する。[21]

ダニーロフたちは、この「黙否法」に由来する弊害が多様な分野で生まれていることを挙示し、この方法の背景に「出来事の真理と理念の真理 правда событий и правда идей」を乖離させ、「大きな真理」のために「小さな маленькая」真理を犠牲とするのを当然とする思考があるとする。そして、この「二つの真理」概念が、大祖国戦争の歴史叙述で支配的であったと、批判的に指摘する。著者らは、この「“二つの真理”概念」が、まさに今「黙否法の理論」を作り出しており、この「概念」の克服が、文学や芸術、そして科学から黙否法を追い出す条件になるとする。そして、教育においても、若者には黙否法を脱した客観的で「単純化と黙否のない」過去と現在の解明が必要であると訴えたのである。[22]

スターリン批判を進めるなかで1960年代に登場してきた「新傾向」をはじめとする研究に対して、ネクリチ事件を突破口に攻撃が開始されることになった。ネクリチの研究書をめぐり1966年２月に始まった問題で、ネクリチは党の除名処分をうけ、歴史研究所の党委員会のメンバーを辞すことになった。67年６月28日の党統制委員会の決定、それを受けモスクワ党委員会に設置された委員会の「調査報告書 справка」に対して、歴史研究所の党委員会は67年12月の22日と27日の会議で「返答報告 ответная записка」を採択し、反論を試みた。しかし、ダニーロフの党委員会は、この頃には力尽きていた。翌68年１月23日の改選集会には、ダニーロフは病気のため「活動報告」ができず、代わりをドラフキン Я. С. に委ねなければならなかった。新しい党委員会はヴォロブーエフに引き継がれるが、この委員会も半年を僅かに越えるだけであった。８月にワルシャワ条約軍がチェコスロバキアに進攻し、研究所の分割プランが実施されていくことになる。[23]

スターリン批判を研究において堅持しようとする研究所に対して、二つの方向から抑止と攻撃がなされることになった。まず、第一に研究組織への攻撃であった。歴史研究所とその党委員会への攻撃として、1968年10月に科学アカデミー歴史研究所をソ

---

21 Там же, С.327-8.

22 Там же, С.332-3.この「二つの真理」論によって、1941年の独ソ戦開始に際しての赤軍の壊滅的な敗退は前以って作成された賢明な防衛プランとされ、開戦初期の解明における「偽造と嘘」が生み出された。これは、1965年に公刊されたネクリチ А. И. Некрич の研究（『1941年6月22日』）への評価と関係していた。そして、この「二つの真理」論には、帝国への併合と支配に関する「二つの悪」論が生む知的状況が先行していた。「大きな悪」と「小さな悪」を対置し、前者に対し「小さな悪」を最小の「必要悪」として容認することで併合と支配を正当化する理論は、1930年代半ばから形成され、体制を貫く論理として機能し維持された。ソヴェト史学におけるこれらの「真理」と「悪」の二元性（二枚舌）とそれを駆使した論程がソ連体制の護教論となることに注目すべきである。

23 Я. С. Дравкин."Даниловский партком" и" дело Некрича". С.94.ネクリチは、歴史研究所が分割されてできた世界史研究所の上級研究員に留まったが、発表の機会は著しく制限され、1976年にソ連から亡命することになる。Там же, С.94.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

連史研究所と世界史研究所に二分する決定がなされ、この分断と組織改編のなかで「新傾向」派の拠点である研究所と党組織そのものが解体され、その担い手への圧迫がなされていく。[24]

この歴史研究所の二分と再編をめぐる過程でソヴェト史学に分裂の兆しが露わとなった。それは、より自由な国外での研究活動と結びついて顕在化した。1967年にプラハでM.ライマンの『ロシア革命』(Michal Reiman, Ruskaá revoluce. 23 únor - 25 říjen 1917. Praha,1967.) が出された。この著作はスターリン批判後の社会主義圏で出され、「プラハの春」のなかで迎えられた。

著者ライマンは、「新傾向」の研究成果に依拠しつつ、十月革命にいたるロシア革命を叙述していた。彼は、スターリン批判後にソヴェト史学に起きた変化を歓迎し、ヴォロブーエフ、ギンヂン、タルノフスキーの研究成果に依拠していた。「プラハの春」が8月にソ連をはじめ東欧5カ国軍により制圧されるなかで、ライマンの研究への厳しい批判が、ソ連本国からなされることになった。[25]

党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所の月刊誌『ソ連共産党史の諸問題』は、68年の第12号で彼の研究への厳しい批判を展開した。チェコスロバキアの「修正主義者」のなかには歴史家や作家もおり、ミハイル・ライマンの本はチェコスロバキアの「日和見分子」だけでなく、反共主義の様々な組織からも称賛を得たと指摘した。さらに、ライマンが1930−40年代のソヴェト史学を批判したことに対し、この時代に十月革命の「レーニン的概念」が確立したと主張し、彼のロシアの「後進性」を強調する論理を反駁し、ロシア労働者の形成とその組織性を示し、共産党の役割を強調し、彼の研究がカーメネフ、ジノヴィエフ、トロツキーの復権を目指すものと厳しく批判した。[26]これは、1968年5月にパリで五月革命が起き、この5月に東欧諸国の自由化にソ連が警告を発し、8月にはソ連・東欧五カ国軍がチェコに進攻するという緊迫した国際情勢をうけてのことであった。マルクス・レーニン主義研究所の上級研究員ゴールプのこの書評は、ソヴェト史学が十月革命とソ連体制の正当性を確認するイデオロギー攻勢に乗り出したことを告げていた。

---

24 ВылцанМ.А. и др., Творческий путь, С.155.研究組織再編による「新傾向」派への攻撃については、和田、「転換するソ連歴史学 −1968-70年−」、65-66頁を参照。この決定は、以下の史学誌で通知された。≪Вопросы истории≫, 1969,№3, С.3-4; ≪Новая и новейшая история≫,1969,№3, С.3-4.

25 Поликарпов, В.В. "Новое направление" 50-70- гг., С.373-4.「プラハの春」や他の国外要因と「新傾向」との連関では、ボンヴェチュの先行研究がある。Bonwetsch B. Oktoberrevolution: Legitimationsprobleme der Sowjetischen Geschichtswissenschaft // Politische Vierteiljahrsheft, 1976, Bd. 17, Heft.2,SS.149-185. ミハイル・ライマン(1930 −)は、モスクワ生れのチェコ人歴史家で、1946年にプラハのチェコ共産党に入党し、1949−54年にモスクワ国立大学歴史学部に学び、1955−69年にプラハのチェコ共産党の高等政治学校で教えた。1960年代には改革路線の支持者であり、1970年に党を除名され、1976年に出国し、ベルリン自由大学に移っている。J.Tomés, ed., Český Biografický Slovník XX. Století. T.Ⅲ,1999,Paseka,p.30.

26 П.А.Голуб, История Октября с позиции реформизма. ≪Вопросы истории КПСС≫, 1968,№12, С.110-123.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

これに先立つ４月８日から10日には、モスクワで第三回イタリア＝ソ連歴史家会議が開かれていた。ここでは、ギンジンとその同僚たちと、チェレプニーンЛ.Ｂ.とネーチキナＭ.Ｂ.のあいだで対立が顕在化し、その後、ボヴィキンとコヴァリチェンコらのシードロフ派で育った人々がチェレプニーン＝ネーチキナ側に移るという現象が生じた。ギンジンは、４月９日の朝の会議で、「ロシアのような国における不均等性と矛盾性への認識が深まっている。それはロシア経済の多ウクラード性に関するレーニンの概括に表現されている」と述べ、これは18世紀から戦前の五カ年計画までの「わが国の全歴史に係わっている」と主張し、チェレプニーンの公式の報告は「我々全ての活動を評価するための基準となりうべき方法的水準にまだ到達していない」と酷評した。当時としては極めて厳しい形で“伝統的”方法との“方法論的”な分岐、不一致について敢えて発言したのである。チェレプニーンは、アヴレフ、ヴォロブーエフ、そしてギンジンの発言に激怒し、この日の夕方の会議で、結語のなかで機会を逃さず、次のように述べた。

「率直に言えば、ギンジンが二つの傾向について述べたことがあまり気に入らない。つまり、一つは40年来の方法論的には既に自らの可能性を使い果たしたもので、もう一つの新しいものは、何年か前に論議のなかで定式化され、それには未来があるとするものである。より控えめに言えば、.....　重要なのは、二つの傾向に境界を区分するのではなく、一緒に活動することである。我々のもとには、一つの、マルクス＝レーニンの方法論があると思う。"我々"と"あなた方"という用法は、私には気に入らない、たとえ論争では、恐らく、これが許されるとしても。」[27]

ネーチキナも苛立ちをこめて、この日の朝の会議で次のように述べていた。

「方法論的には、私の考えでは、概念の新しさという考えをその概念の積極的な論拠とするのは許されない。科学における新しいものは、正しいものと同一ではない。新しいものといっても様々だ！.....新しさ、それ自体は決して論拠とはならない。論拠となりうるのは、ただその概念が真実に近いということである。！したがって、ここできわめて頻繁に響いている訴え、我々が新しい概念を発展させており、あなた方は古いということ、これは批判に耐えるものではない。」[28]

同時に、歴史研究所で進められてきた近代ロシアの社会・経済構造、ロシア帝国主義の特質把握とロシアの革命論への攻撃が繰り広げられることになった。1960年代には、シードロフ派の研究から、帝国主義時代のロシアの社会経済構造に関する新しい認識が生まれていた。ここでは「多ウクラード性」の視点からロシアにおける地主制をはじめ多様な経済制度（ウクラード）の全体としての関連と構造を認識する研究が強く進められ、69年には、ウラルのスヴェルドロフスクで大十月社会主義革命史学術

27 Поликарпов, В. В. ≪Новое направление≫ 50-70- гг., С.375. : Документы советско- итальянской конференции историков 8-10 апреля 1968 г.,М.,1970, С.224-5,280-281.
28 Документы советско- итальянской, С.253-254.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

会議が、十月革命勝利の前提と社会経済ウクラードとの相互関係という視点から、学術会議を開催し、その論集は1972年に、スヴェルドロフスクから公刊されることになる。[29] 他方で、1960年代後半から70年代初めにかけては、「新傾向」派への批判がロシア社会の「多ウクラード性」への批判を中心に展開され、「新傾向」派の研究が抑圧されていく時期であった。

1960年代後半には、このように、歴史研究においてスターリン批判を継承し進めようとする動向と、それを抑止し揺り戻そうとする動きがせめぎあい対抗していた。歴史研究所という研究組織とその党委員会への攻撃と再編に続いて、第二のイデオロギー的な批判が「多ウクラード性」論者の提示する「新傾向」をはじめ、スターリン批判のもとに進められた研究に対して向けられ始めた。

歴史研究所のダニーロフの動向と農業集団化の研究に関しては、先に見たように1966年2月から4月にスターリンの批判を抑止しようとする動きが大きく進んだ。さらに、1970年6月には共産党中央委員会付属の党統制委員会のペーリシェ A.Я. Пельше宛に、「密書 доношение」が届けられた。そこでは、次のように述べられていた。

「歴史研究所では、ある時期から....マルクス＝レーニン理論の重要な問題に関して疑わしい見解を主張する、一定のグループ（ネクリチ、ゲフテェル、ドゥラフキン、ヤクボーフスカヤ、ダニーロフなど）が形成された。これらの見解を、彼らは執拗に宣伝したのであり、口頭でも出版物においても、自らの著作を公刊するために、特にナウカ社でその可能性を広く持ちながら、宣伝している。...上記のグループは、1965－66年に研究所の指導部を事実上、掌握するために意図的で執拗な活動を行った。我々が深く確信するところでは、そして、このことは歴史研究所のかつての党委員会の文書、党集会の議事録、および上記の人々と彼らの仲間の言動から明らかなように、このグループは歴史研究所を“学術の自由化”、“学術探求の自由”などの闘いに、つまり、学術における党派性の拒否に、学術の一定の分野を刺激し方向づけるセンターのようなものに転化させようとの目的を追求した。...総会では、グループの代表たちが検閲総局の廃止を要求し、それは、彼らによれば学術の発展を妨げる要因であると特徴付けられていた。これらの人々は、スターリン個人崇拝への批判という口実のもとに、自らの出版物や口頭での言動でソ連共産党史を修正しようрeвизоватьと試み、トロツキストたちやブハーリンの名誉回復を試み（ドゥナエフスキー、ブハーリンの娘グルヴィチ）、集団化で（B.ダニーロフ）、工業化、国防、とくに1941－1945年の戦争前夜の分野において、党の政策を誹謗したのである。これらの見解の体系全体が、本質的に修正主義の性格をおびていた。研究所の党組織は、このグループの見解と活

29 К. Тарновский. В преддверии Октября. ≪Наука и жизнь≫,1987,№10, С.17.1969年5月のこのスヴェルドロフスク会議の組織に当たり、会議での基調報告を行ったのはタルノフスキーであった。B.A. Елец, В. В.Шелохаев. Творческий путь К. Н. Тарновского.≪Исторические записки ≫, Т.118,1990, С.209.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

動に対し党としての評価を下すことができないでいた。」[30]

ペーリシェは党中央委員会の政治局員にして党の統制委員会議長であったが、すでに1967年５月にネクリチを査問し、６月28日の彼の党除名決定を行っていた。[31] このペーリシェに宛てられた「密書」は、その作成者の署名のない、まさに「密告」である。そして、何故か非難される人物のなかに、ゲフテェル以外のタルノフスキーをはじめ本来のシードロフ学派の論者が含まれていない。だが、この1970年の文書は明らかに、スターリン批判の抑止へ向けた動きが態勢を整えたものとして注目される。

Ⅲ．敗退 － ソヴェト史学の転換

この「密書」につづいて、1972年３月には、すでに、「新傾向」を非難する文書の作成が準備され始めた。７月には、科学アカデミーの歴史部会 Отделение истории ＡＨを通じてトラペーズニコフの支持者たちがそのような決議を採択させた。だが、ソ連邦史研究所では、所長のヴォロブーエフがそれを受け入れる状況ではなかった。[32]

ポリカルポフの研究によると、トラペーズニコフの指導部は、スターリン批判を進めた第20回、第22回党大会の決定に言及した部分を抹消し、「スターリンの個人崇拝期」という用語自体を禁止した。他方で、ボヴィキンを動かし、アカデミーで「新傾向」の代表者たちを排除する方針に出ていた。1972年３月にトラペーズニコフの配下にあるフローモフ C. C. Хромов、ヴァガーノフ Ф.М. Вагановが、科学アカデミーで論議を提起し、詳細な決議を採択させた。[33]

この1972年３月９−10日の会議は、歴史研究所の二つの部門、つまり十月革命以前とソヴェト期の部門に属する研究者の合同会議であったが、党中央委員会付属のマルクス＝レーニン主義研究所、社会科学研究所など他の研究機関の代表を含め、歴史研

30 В. П. Данилов, С. И. Якубовская, Неопубликованная статья... С.325.

31 Я. С. Дравкин."Даниловский партком" и" дело Некрича". С.91.ペーリシェ Ａ.Я. (1899-1983) はラトビア農民の出で、1917年の革命に参加し、1918-29年まで全露非常取締り委員会 ВЧК に勤務した典型的なレット（ラトビア）人共産主義者である。第二次大戦から戦後にかけラトビア共産党書記として活動し、1966年4月からは党統制委員会の議長に就いていた。

32 В. В. Поликарпов. ≪Новое направление≫ 50-70ｘ гг., С.376.

33 В. В. Поликарпов. ≪Новое направление≫в старом прочтении. ≪Вопросы истории≫, 1989,№3, С.46.「「個人崇拝期」という誤った非マルクス主義的な用語」が広がっているとの最初の警告は、1966年1月30日の『プラウダ』においてであった。 Е.Жуков, В. Трухановский, В.Шунков, Высокая ответственность историков. ≪Правда≫,30 января 1966 г.フローモフ（1920 － ）は、1946年にモスクワ国立大学史学部を卒業し、Ф.Э.ジェルジンスキー研究で学位を取得し、66年から党中央委員会の学術部顧問 консультантを務め、1979年からペレストロイカが歴史学で本格化する88年まで科学アカデミーソ連史研究所の所長となった。ヴァガーノフ(1921-1994)は、1960年に党中央委員会付属の社会科学アカデミーを卒業し、1920-30年代の「党右翼偏向」の研究で学位をとり、67年から党中央委員会の学術部で指導員 инструктор、71年から顧問を務めている。А. А. Чернобаев. Историки России. Кто есть кто. М.,2000, С.77,550.二人は、トラペーズニコフの指導する学術部で活動したのである。

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

究所の枠を越える大きな意味を持っていた。この会議では二つの論集が取り上げられ審議された。『ロシアのプロレタリアート：相貌、闘争、ヘゲモニー』（1970年、モスクワ）と『専制の打倒』（1970年、モスクワ）である。会議では、これらの論集の積極的成果とともに「深刻な誤った命題」が指摘され、論集執筆者に厳しい批判がなされたのである。論集『ロシアのプロレタリアート』では、1960年代に労働運動史を先導したキリヤーノフЮ.И.Кирьяновに対し、労働者の「意識性」と「組織性」に関する＜新しい方法＞ や ＜革新новизм＞ が俎上に載せられ、労働者の 「スチヒーヤ性 стихийность」の過大視とボリシェヴィキの革命運動への過小視があると厳しく批判された。もう一つの論集『専制の打倒』では、とりわけヴォロブーエフが論難され、十月革命が労働者と貧農との同盟ではなく、全農民との同盟であったという主張が厳しく批判された。科学アカデミー歴史部会ビュローは、このように議論を史学誌において通報しながら、この3月会議での決定において、審議は「十分に高い学術水準で」なされたと自認し、誤ったテーゼの著者たちを「革新者」として「新しい」「進歩的な」傾向を代表するものと描こうとすることもなされたと非難し、審議のなかで「十分な自己批判」もなかったとヴォロブーエフを名指しで批判した。この決定は、革命における労働者のヘゲモニーを確認し、共産党の指導的役割を強調し、「スチヒーヤの要素 стихийный элемент」を過大視し労働者をあたかも独立し自立的なものとすることを批判し、革命におけるプロレタリアートと同盟者（農民）の問題を明確にすることを求めたのである。[34]

同じ趣旨で、この二つの論集に向けて、1972年初秋に厳しい批判が出された。『ロシアのプロレタリアート』に対する批判は、『共産党史の諸問題』第9号に掲載された。ここでは、キリヤーノフ、ヴォロブーエフへの批判と並んで、タルノフスキーへの批判が注目される。1969年のスヴェルドロフスク会議でのタルノフスキーの報告は、一般民主主義的課題は社会主義革命の枠内でのみ解決可能であった、「したがって、ブルジョワ民主主義革命の社会主義[革命]への成長転化ではなく、連続的な непрерывный（?!）[革命]について語るのがより正しい。十月革命においては、単に

34 В отделении истории АН СССР. Постановление Бюро отделения истории АН СССР об итогах обсуждения в институте истории СССР изданных в 1970 году сборников ≪Российский пролетариат: облик, борьба, гегемония≫ и ≪Свержение самодержавия≫. ≪Вопросы истории≫,1972,№.8, С.141-145.

35 П.А.Голуб, В.Я.Лаверычев, П.Н.Соболев, О книге≪Российский пролетариат; облик, борьба, гегемония≫. ≪Вопросы истории КПСС≫,1972,№.9, С.120-132.タルノフスキーの発言は、スヴェルドロフスク会議（1969年5月）の内容を逸早く伝えた科学アカデミー・シベリア支部の機関紙から引用されている。≪Известия Сибирского отделения АН СССР≫, серия общественных наук. Вып.1,№.1, 1970, С.148.タルノフスキーのロシア革命論は二月から十月への「成長転化」ではなく「連続」を説くもので、評者らが「?!」を付して引用したように、党の正統史学には収まり得ない。このスヴェルドロフスク会議の討論のなかで、「多ウクラード性」論者と、ホヴィキンらの資本主義の発展(水準と内容)を強調する研究者とのあいだでの対立が現れていた。Там же, С.150,152. 評者たちは、十月革命の階級配置としてミンツИ.И.Минцの『十月革命史 История Октября』を論拠に提示している。ミンツのロシア革命史は、1970年代以降のソヴェト史学の準拠すべき公式革命論となる。

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

貧農とだけではなく全ての農民と労働者階級は同盟したということである」と述べた、と指摘する。この論集を、十月革命は労働者と貧農の同盟のもとで達成されたという視点から評者たちは批判し、その編集部と執筆者たちは社会主義革命の勢力配置へ「誤った評価」を下し、わが党の農民に対する闘争の経験について「歪められた判断」に導いていると批判し、「創造的発展の装いのもとに」「革新をてらって」研究がなされたと厳しく論難したのである。[35] このタルノフスキーへの言及と批判は、翌年に展開される「多ウクラード性」への攻撃を予告するものであった。

もう一つの論集『専制の打倒』に関しては、『歴史の諸問題』（1972年11号）にチェルメンスキーＥ.Д.Черменскиｊが厳しい批判を行った。ヴォロブーエフの二月革命論には詳細な事実を提示しつつ反駁し、ギンジンの「オクチャブリスト的資本」概念や十月革命での全農民との同盟という考えを批判する。チェルメンスキーは、全体としてこの論集が大衆の革命運動における「スチヒーヤ性」の要素を過大視し、ボリシェヴィキ党の役割を十分に評価せず、「学術的に誤った成立しない結論に達した」と確認する。そして「労働運動におけるスチヒーヤ性の要素を過大視し、共産党の指導的役割を矮小化しようとする、歴史のブルジョワ的偽造者たちとの闘争」を呼びかけたのである。[36]

1972年３月９－10日の会議にもとづくソ連科学アカデミー歴史部会ビュローの決定は、この年の初秋からの激しい批判を先導するものとなった。この決定が廃棄されるのは16年を経て、88年６月９日の歴史ビュロー定例会議においてであった。この決定が「停滞の時期」に特徴的な歪曲をもたらし「否定的役割」を果たしたと確認し、「学問における意見の社会主義プルーラリズムを極めて苛酷なシェーマで取り替えてしまった」、反論は掲載されず「歴史学における権威的、指令的方法の再興」であったとして破棄されたのである。[37] だが、この72年３月の決定が、ペレストロイカの半ばまでのソヴェト史学を長期にわたって拘束し、歴史家に重くのしかかったことの意味は大きい。

さらに、1972年の３月下旬には新たな状況が生まれていた。スヴェルドロフスクのウラル大学で1969年の５月27－31日に開かれていた研究集会、ここでの主題は「多ウクラード性」であったが、その成果が論集『資本主義ロシア史の諸問題』として、1500部、公刊されるにいたったのである。翌73年３月21日と22日の両日、共産党中央委員会の学術部に於いて、歴史家を集めた審議会が開かれた。ここでは、学術部長トラペーズニコフの報告に基づき「勧告 рекомендации」が採択された。この「勧告」では、「新傾向」の著作に対して、次のような批判がなされた。

「ヴェ・イ・レーニンの著作を“新たに読みこむ новое прочтение”との見せか

36 Е.Д.Черменский. ≪Свержение самодержавия≫, сборник статей.М., изд-во≪Наука≫, 1970. ≪Вопросы истории≫,1972,No.11, С.153-164.
37 В Бюро отделения. ≪Вопросы истории≫,1988,№10, С.175.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

けの下で、しばしば修正主義的な諸概念が提出されている。....党派性という原則が不十分であり、十月革命の社会経済的前提の研究において「新傾向　новое направление」とかいう成り立ちえない用語があらわれた。....著者たちのなかにはロシアの農民を専制の社会的支柱とみなそうとしているものもいる。十月社会主義革命における動因たる階級諸力のレーニン的分析からの後退が起きた。農民全体が労働者階級とともに社会主義革命に向かって歩んだとの誤ったテーゼが提出されている。」

この3月21－22日の審議会では、ソヴェト歴史学の形成を担ってきた一連の歴史家たち、チェレプニーンやネーチキナ、さらにこの段階で、それまで「多ウクラード性」論を支持していたドゥルジーニンH.M.Дружининがこの「新傾向」への批判にまわり、ソヴェト歴史学の大きな転換に賛同し加勢したのである。[38] チェレプニーンとネーチキナが1968年4月のイタリア・ソ連歴史家会議で「新傾向」に反対の立場をとったことは先に示したが、ドゥルジーニンはこの3月会議の直前にボヴィキンの説得にあって動いていた。[39] 1967年夏のネクリチ事件の展開のなかでは、ネクリチ批判を先導した『共産党史の諸問題』誌編集部に歴史家たちは批判の書簡を寄せており、そのなかでドゥルジーニンもネーチキナもネクリチを擁護し、ともに「個人崇拝の時期」への再帰を危惧し、「罵倒し批判を受け付けない高圧的な批評」を批判していた。[40] この両者にみられるネクリチ擁護の論理とその基底にある、党の指導性を前提にした愛国的叙述の肯定と党＝ソヴェト国家体制への信奉は、しかしながら、1973年の彼らの「新傾向」批判の行動にも伏流していたと思える。

こうして1972年から73年3月の審議会を経て、74年には「新傾向」には「多ウクラード性」論を含め、終止符がうたれた。1972−73年のこのソヴェト史学の大きな転換を、

---

38 В.В.Поликарпов.≪Новое направление≫50-70-х гг.,С.376-7.この3月審議会を「全連邦歴史家討論　разговор」とし、その決定を科学アカデミーは承認した。Минц И.И.,Нечкина М.В.,Черепнин Л.В., Задачи советской исторической науки на современном этапе её развития.≪История СССР≫,1973,№5.С.11-12,15-16.さらに『ソ連邦史』とともに『歴史の諸問題』、『共産党史の諸問題』といった代表的な史学誌で、この歴史家会議の総括が紹介され、それが歴史研究への方針として提示された。Советская историческая наука на современном этапе.≪Вопросы истории≫,1973,№5,С.3-14: Важные задачи исторической науки.≪Вопросы истории КПСС≫,1973,№5,С.7-23,11.

39 アカデミー会員チェレプニーンのこのような行動に、彼の「深い倫理的危機」が窺えた。後に、彼は自らの著述において「コスモポリタニズム」への歴史家の批判キャンペーンを含め、歴史学におけるスターリン主義を完全に正当化しようとしていた。Черепнин,Л.В. Основные этапы развития советской исторической науки.//Очерки истории исторической науки.М.,1985,Т.5,С.12.В.В.Поликарпов.≪Новое направление≫ 50-70-х гг.,С.398,прим.86.ドゥルジーニンの1973年3月の歴史家会議に際しての「渡り перелёт」（裏切り）について、ポリカルポフが状況を生々しく伝えている。この会議の一週間前に、ドゥルジーニンは態度を決めるように電話で求められると、この病弱なアカデミー会員は妻が出したマイクに向かって「ヴァレリー・イヴァノヴィチ[ボヴィキン]に、ウラル論集の審議に際し彼が語ったこと、全てに同意する」と口述した。彼は、ボヴィキンは「全く正しい」、多ウクラード性の問題はマルクス主義の一掃を目指している、自分の資本主義の生成論では、ロシアに「何等の特殊で、独自のものはない」、相違は、発展のテンポと形態と規模に過ぎないと伝えた。1974年秋まで、彼はボヴィキンの顧問として年に似合わない機敏な役割を果たしたのである。В.В.Поликарпов, указ. статья,С.376-7.

40 Отрешившийся от страха. Память А.М.Некрича.М.,1996,С.168-170.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

ソ連科学アカデミー・ソ連邦史研究所の帝国主義部会の活動を監察する委員会が作成した「報告書 докладная записка」に基づいて、より具体的に確認しておこう。[41]

この報告書では、科学アカデミーの歴史部[党]ビュローは、1972年7月4日の決定で、当部会の学術出版物にみられる「重要なイデオロギー的・理論的な誤り」について、新聞・雑誌で報道されたことに注意を払った。さらに、1973年3月21－22日の党中央委員会の学術部主催で開かれた歴史家会議で、会議の参加者にそのことが指摘され、一連の出版物の誤りが指摘されたと報告書は述べ、それらの著作物とは、次の通りとする。論集『専制の打倒』、この編集部には、部会から Л.М.イヴァノフ、タルノフスキーらが入り、論集『ロシアのプロレタリアート』には責任編者としてイヴァノフが、編集者としてタルノフスキーとキリヤーノフらが、論集『資本主義ロシア史の諸問題』(Вопросы истории капиталистической России)では、編集部にイヴァノフ、タルノフスキー、M.C.シーモノヴァらが部会から入っていると指摘・確認される。

そしてこの三点の学術論集の内、第一については、「スチヒーヤ性の過大視と二月革命におけるプロレタリアートとボリシェヴィキの役割の過小視」がなされ、「あたかも十月革命の勝利を担保したのは、二月革命で提起されたが、しかし解決されなかった諸課題であったとの誤った主張」がなされていると指摘される。第二の論集に関しては、「二月革命後の革命運動において、ロシア・プロレタリアートのヘゲモニーが失われたという深く誤った主張」が提出され、「異なる歴史段階での社会主義とブルジョワ民主主義革命の課題の相関についての、プロレタリアートの意識水準を決める諸要因、民族地域における社会主義革命の諸課題などについて誤った命題」が含まれている、と批判した。

そして第三の論集に関しては、革命前ロシアの社会経済体制を「多ウクラード性」という観点からとらえる“新傾向”が表明されていると指摘し、この“新傾向”に示されている「見解の全体系」への批判を展開する。この報告書では、資本主義ウクラードに他のウクラードと同等の位置を与え、社会構成体の発展と交代に関するマルクス主義の根幹に疑念が呈されていること、ロシアの資本主義の発展の特殊なタイプが提示されていること、ロシアにおいて前および早期資本主義ウクラードが保持され、十月革命までロシアの農業体制に封建＝農奴制関係が支配したという主張がなされている、と指摘される。そのうえで、これら三つの主張＝論点での「多ウクラード性」に基づく新傾向の「見解の全体系」を「ロシアにおける資本主義の発展の水準と性格に関する誤った断定は、十月社会主義革命の時期における階級と勢力の配置に関する誤った結論を自ら導き出した」と、批判したのである。

41 これは、「新傾向」を初めて本格的に史学史に於いて取りあげたポリカルポフが史料として紹介したものである。この文書は、タルノフスキーの文書（アルヒーフ）から提出され、文書自体に日付はないが、1974年秋までに作成された。

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

この批判の大枠のなかで、“新傾向”が示した個々の誤りが、列挙されていく。それは、革命におけるプロレタリアートの主導性の問題であり、十月革命でのプロレタリアートと全農民の同盟という問題である。農民の社会的分裂が不可能で、社会主義革命の初期の段階で全農民とプロレタリアートが同盟せざるを得ないという結論は「誤っている」と指摘される。また、生産力と生産関係の矛盾として革命をとらえるマルクス主義のテーゼに疑念が呈されているとも、二月革命の担い手にブルジョワジーを含める見解も出されているとも指摘される。さらに、ロシアの歴史的発展の特殊性を強調するテーゼはロシア革命の経験を他の国々が参照するのを妨げるとも、批判される。

この報告書は、上記の三つの論集、とりわけ第三のスヴェルドロフスク論集に見出される“新傾向”へ多くの具体的批判を行いながら、この帝国主義部会の研究者による一連の研究を批判している。労働者を扱ったキリヤーノフや、農民をロシア専制の基礎とみなしたとしてアヴレフ、“新傾向”を宣伝し「誤った規定」を含む史学史を著わしたとしてタルノフスキーの名が挙げられている。さらに、部会ではその研究員の「誤り」に批判的分析がなされることはなかったとし、部会で出版が推奨されたシーモノヴァのモノグラフィーには、史料の解釈が「ロシアの農業体制における前資本主義的諸関係の支配という深く誤ったアプリオリーな規定、“新傾向”の基礎の一つをなすものから出発している」と批判し、部会が全く対応していないことを厳しく論難していた。[42]

この報告書は、部会の党組織がこれらの誤りに十分に対処しなかったことを指摘し、1973年7月5日付けの研究所党ビュローの決定で「自らの学術成果のイデオロギー・理論的水準に対する党の責任という感覚の鈍化、部会における作業のしかるべき組織化の欠如」を指摘されたにもかかわらず、その決定が実行に移されないままであるとする。その主要な背景として、研究所長を務めていたヴォロブーエフの「誤った姿勢」を挙げ、この報告書では「現状を矯正し、祖国史におけるきわめて重要な諸問題の解明において、今後、誤りを防ぐような緊急かつラジカルな措置」が必要とし、現部会にかわる新しい部局の設置と人員の補充を求めたのである。[43]

この報告には、委員会の議長ブガーノフ B.И. Буганов、研究所の副所長ボヴィキン B.И.をはじめ委員会メンバー8人中6人が賛同署名している。部会の党ビュロー書記のシーモノヴァだけが強く反対し、この報告書への署名を「断固拒否する」と述べ、「深刻な事態からの脱出方法として提起された部会の解体と一連の研究員の解雇には同意できない」と述べた意見書を特別に提出した。[44]

こうして1974年に、組織的・イデオロギー的攻撃のなかでソ連史研究所の所長ヴォ

42 B.B. Поликарпов.≪Новое направление≫ 50-70- г г., С.383.
43 Там же, С.384-385.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

ロブーエフは解任され、その帝国主義部会は解体された。イデオロギー的にも、1972–73年の批判を受けて、「新傾向」はソヴェト歴史学のなかで抑止されていくことになった。スターリン批判を歴史研究のなかで進めた「60年代人」研究者が、その後訪れた70–80年代のソヴェト体制のなかで示した個々の「迂回」と対応は様々であった。この抑止と禁圧の波は、個々の研究者に対してその高さも強さも異なり、緩和も伴いながら作用したのである。[45]

全体としては、ソヴェト史学には「墓地の静けさ」が訪れ[46]、党中央委員会のイデオロギー担当の政治局員スースロフ、党中央委員会に付属する学術部の部長トラペーズニコフの監督統制のもとにおかれた。1973年３月の党中央委員会の学術部での審議会では、ソヴェト史学の「新傾向」は「修正主義」と特徴づけられたが、部長のトラペーズニコフは、「新傾向」はレーニン主義の基礎への侵害の企てであると厳しく批判した。[47] この年の夏に、トラペーズニコフは党の理論誌『コミュニスト』において、「社会・経済構成体の特徴づけを多ウクラード性の分析をもってすりかえる試みがあった。このことは当該構成体にとって規定的であり特徴的であるウクラードの消失へと、要するに誤った諸結論へ導いた」と厳しく批判し、[48] 多ウクラード性の観点からのロシア資本主義研究、したがってそこでの農業・農民問題の研究も頓挫したのである。このような状況で、ソヴェト歴史学を主導したのは、チェレプニーン、ネーチキナら

---

44 Там же, С.386. シーモノヴァのモノグラフィーの出版は、この後15年間、棚上げとなった。Там же, С.378. 彼女のモノグラフィーは、アンフィモフの責任編集のもとで1987年にナウカ社から公刊される。М.С. Симонова. Кризис аграрной политики царизма накануне первой российской революции. М.,1987. シーモノヴァはストルィピン農業政策の研究でスターリン批判後に研究を進め、1969年5月のスヴェルドロフスク会議では、タルノフスキーを積極的に支持して発言している。≪Известия Сибирского отделелния Акдемии наук СССР ≫. Серия общественных наук. Вып.1,1970, С.150. スターリン批判への揺れ戻しで中断された『ソ連史学史概説』第５巻が、20年を経て1985年に公刊されると、そこでタルノフスキーはシーモノヴァの研究を高く評価している。Очерки истрии исторических наук в СССР. Т 5,М.,1985, С.330, 331, 333. この報告書を作成した委員会の議長のブガーノフ(1928-1996)は、歴史文書学の分野からでたロシア中世史の研究者であった。この1973-74年のソヴェト歴史学の転換のあと、彼は科学アカデミー歴史研究所の十月革命以前の史料学および公刊部門の部長を長きにわたって(1975-1984年)務めることになる。

45 1982年にギンジンの遺稿「多ウクラード性」が『経済学』に掲載された。この論文は1960年代から1972年にスヴェルドロフスク論集の上梓される時期までの、「多ウクラード性」論をキーにしたロシア資本主義論の進展を提示しており、この遺稿の公表自体が一定のイデオロギー的緩和を示していた。И. Гиндин, В. Тимошенко. Многоукладность в социально- экономической структуре России конца XIX - начала XX в. ≪Экономические науки≫,1982,№2, С.61-68. 因みに、ダニーロフが博士号を得たのは1983年2月のことであるが、ブレジネフが死去し(1982年11月)、トラペーズニコフが罷免された後の政治状況のなかでである。(奥田　央「ダニーロフ」、347頁)トラペーズニコフは、ブレジネフ体制の下で、1965〜83年までの18年間、党中央委員会の学術部長を務め、66年から党中央委員会の成員で、84年３月に死去した。同じく党中央委員会政治局で66年からイデオロギーを担当したスースロフ Суслов, М.А.は、82年に死去した。1982-84年のこれら三人の死去は、ソ連体制のイデオロギー統制に一定の緩和をもたらしたといえる。

46 В.В. Поликарпов, ≪Новое направление≫ 50-70 -х гг., С.378.

47 Историки России. Биографии. М.,2001 , С.829 . この会議の速記録として、次の文献がある。Актуальные проблемы общественных наук на современном этапе.М,1974.

48 С.П. Трапезников. Советская историческая наука и переспективы её развития.≪Коммунист≫, 1973,№11, С.38.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

の旧い世代と、ボヴィキンをはじめコヴァリチェンコらのロシア資本主義論を担う新しい世代、つまり「70年代の継承者」であった。そして、70年代から80年代半ばまでのソヴェト史学は、社会構成体の発展と継起的交替という基本テーゼのもとで、帝政ロシアの資本主義の発展とその水準を確証し、農村での資本主義の発展と二つの社会戦争の存在を定理とし、この歴史認識の下でロシア革命は二月革命から十月革命へ「成長転化」したとされ、そこでのボリシェヴィキ＝共産党の指導性、十月革命における労働者と貧農の同盟を基礎にした社会主義革命の性格が弁証された。

歴史研究所の所長ヴォロブーエフは解任され、ウラル大学のアダーモフは非難され歴史学講座の主任をとかれ、タルノフスキーを含めこの派に属する一連の研究者に、大きな困難の時代が訪れた。その後15年間、＜新傾向＞を擁護する文言は一行たりとも印刷物に現れることはなかった。この問題で最も誤りが深いとされた人物、タルノフスキーには、最高資格審査委員会(ВАК)によって既に合格した博士論文の認証を拒まれ、論文を撤回せざるを得ない状況にいたった。[49]

タルノフスキーの博士論文「ソヴェト歴史学の現段階における帝国主義ロシアの社会経済史の諸問題」は、すでに1970年の10月に歴史研究所で審査され合格となっており、それへの高い評価も寄せられていた。しかし、彼の博士論文は公刊されず、博士号の授与は認証されなかった。最高資格審査会で反対意見が出され、授与の決定はひっくり返されたのである。学位の取得と保持を検討するこの審査会でタルノスキー論文を反駁したのはヴァガーノフΦ.M.であった。党中央委員会の学術部（部長トラペーズニコフ）のもとで顧問を務めるヴァガーノフの意見が決したのである。[50] ヴォロブーエフが解任された後の歴史研究所の所長にはナロチニツキーA.Л.Нарочницкийが就いた。彼は、73年3月の歴史家会議では新傾向に厳しい批判を放っていたが、彼のもとで研究所の帝国主義期部会が廃止され、タルノフスキーは歴史地理部会へ配置換えとなった。彼はここでソ連の歴史地図の作成に従事し、「新傾向」批判キャンペーンの繰り広げられるなかで最高資格審査会と博士論文の認証をもとめ交渉を続けたが、論文を撤回せざるをえなかった。彼は、クスターリ・手工業という新しい分野、或いは『イスクラ』紙を中心とする革命運動の研究に向かった。1981年10月に、歴史研究所レニングラード支部に提出した第二の新たな博士論文は受理され合格となった。タルノフスキーは「迂回」しつつ、この時代を生きたのである。[51]

「多ウクラード性」の論客ギンヂンは、73年9月1日から年金生活に入り、1980年に死去するが、死後、彼の著作の一部は公刊されようとするがボヴィキンの妨害で実

49 В.В.Поликарпов, ≪Новое направление≫, С.46.

50 В.А.Елец, В.В.Шелохаев. Творческий путь К.Н.Тарновского, С.212-3,219-220, прим. 2. 彼の博士論文に対するヴァガーノフの見解は、「新傾向」を批判し、70年代を歴史学の発展が「人為的に阻害された」時期とみなすことへの反駁から窺える。Ф.М.Ваганов, А.Н.Пономарев. "Не идеализовать, но и не драматизировать..."≪Советская культура≫,1987, 4 июля.

51 В.А.Елец, В.В.Шелохаев. Творческий путь К.Н.Тарновского, С.214-6.

NII-Electronic Library Service

University of Shizuoka

現されることはなかった。[52] シーモノヴァの著作は出版までに15年を要した。タルノフスキーとダニーロフの論文が収録されている『ソ連史学史概説』第５巻（Очерки истории историческиой науки в. СССР. Т.5,М.,1985）は、上梓まで20年間を要した。ウラル大学では、アダーモフが講座主任を追われていた。[53]「新傾向」派が抑圧されるなかで、1970年代にはダニーロフも研究が鋭い政治性をおびることを避けつつ、研究を続けざるを得ない状況におかれた。[54]

トラペーズニコフ（1912-84）は、共産党中央委員会の学術部長として、またロシア農業史の専門家として共産党の学術研究、とりわけ歴史研究における党の政策の実施を監督する立場にあった。ロシア農業史にレーニン主義の「基礎」というドグマを再び持ち込んだ彼は、1976年に歴史家としてソ連科学アカデミー準会員となる「名誉」に浴している。[55] 共産党のイデオロギー分野で大きな力を持った政治局員M.A.スースロフ（1902-1982）とともに、彼は70年代から80年代初めにかけてソ連農業史へのイデオロギー統制に重く暗い影を落とした人物であった。ロシア革命によって再生した共同体が農業集団化に有効な組織になりえたかどうかをめぐって、ダニーロフとは対立があり、トラペーズニコフは共同体に依拠した農業集団化というテーゼのもとでマルクス＝レーニン主義、ひいてはスターリン主義の農業政策と集団化を正当化していた。ダニーロフにとっても農業集団化研究で自ら揺れ戻しにあい、農業＝農民研究で共感する「多ウクラード性」論者とりわけアンフィモフへの抑圧のなかで、72－73年の転換は困難な時代の到来であった。

（次号につづく）

52 В. В. Поликарпов, "Новое направление" 50-70х гг, С.377-8.
53 Там же, С.378.
54 М. А. Вылцан и др., Творческий путь Виктора Петровича Данилова, ≪Вопросы истории≫,2005, №.9, С.155.
55 ソ連科学アカデミー歴史部会は、ミンツも名を連ね、1982年にトラペーズニコフの古希を祝い、彼の経歴と業績を紹介し称揚した。В Отделении истории АН СССР 70－летие С.П.Трапезникова. ≪Вопросы истории≫, 1982,№.1, С.108-110.

NII-Electronic Library Service